

「惨風悲雨・世路日記」を著わした菊亭香水であり、晩年は史家として鶴谷を号して名を成したが、矢野とともに上京して報知社員となるのは明治十五年、のちの話である。西南の役当時は師範学校を出て郷里の教職にあった。

表紙解説

市園道祖神

所在地 宇目町重岡字市園

この道祖神は通称市園道祖神と呼ばれている。総高一〇八cmで材質は凝灰岩で中央に道祖神と陰刻されている。文化五年（一八〇八）の造立である。猿田彦の塔などには有るが、道祖神と書かれたものは、佐伯・南郡にもその例がないのではないか、もし有ればお手数ですが、是非お知らせ下さいますようお願いします。

道祖神といえ、関東・中部地方の男女二神が手を取り合い、和合の形を示したものを思いおこす。

道祖神は塞さいの神ともいわれる。塞さいはささええぎぎるの意で悪霊などが入り込まないように防ぐために祭られた神が本来の道祖神であった。幸の神・障の神・歳の神・妻の神

などと呼ばれるのは塞の音に通じるため呼ばれたものか。

『古事記』『日本書紀』にあらわれる、「ふなどの神」ふなどのかみ岐神はこれで、また塞大神・道神・禊神とも古書には記されて来たように、多くは道路の辻・村境・峠などに奉祠され、外来の邪悪なものをさえぎる神とされている。

この神が猿田彦命に付会されたことは、古典にも明らかであるが、その理由は明らかでない。おそらく神々の来臨にあたり、その先導にあたる神と考えられていた猿田彦が、境の神としての道祖神に連想されたものである。

道祖神の祭は正月の十四・十五日頃に行われるものが一般的で、辻に竹やわらを積みあげて火をかけるものが多い。どんど焼・左義長はこの道祖神祭りに外ならぬとみられて来た。

関東・中部地方の二神和合の姿は、境界をかためるために、この男女円満の姿を示すことは、邪悪者をしりごみさせるのに有効だと考えられて来たという。道祖神は更に縁結びの神・性の神とも見られている。

参考資料 ふるさとの文化財うめまち

世界大百科辞典（平凡社） 外